

奈良・脇本遺跡に建物柱跡 泊瀬齋宮の関連施設か

天武天皇の娘、大来皇女が滞在した「泊瀬齋宮」があったとされる奈良県桜井市の脇本遺跡で、7世紀後半ごろの建物跡が見つかり、県立橿原考古学研究所が19日、発表した。橿考研は「泊瀬齋宮の関連施設の可能性もある」としている。

橿考研は今回の調査で、新たに東西約9㍎、南北約3㍎の範囲に「L」字型の柱列跡4個を確認した。

今回の調査地の東側エリアでは過去に、「コ」の字型の柱列跡を確認していたが、建物跡が判然としなかった。今回の調査で、柱列跡を含む全体規模が東西約19㍎、南北約8㍎の大型掘っ立て柱建物跡と判明した。

天武天皇の宴会場跡？



脇本遺跡から出土した7世紀後半ごろの大型建物跡（手前）
奈良県桜井市（県立橿原考古学研究所提供）

日本書紀には、大来皇女が伊勢神宮に仕える前の天武2（673）年、泊瀬齋宮に滞在し、身を清めたと記述されている。このため橿考研では、今回確認された大型建物跡が、周辺の地形などから泊瀬齋宮の南端に建てられた宮の関連施設の可能性もあるとしている。

日本書紀に記述

奈良芸術短大の前園実知雄教授（考古学）は「7世紀後半に天武天皇が周辺の『とどろきの淵』近くで宴会を開いたとの日本書紀の記述もあり、大型建物は行幸先で設けた行宮あんぐうの関連施設かもしれない」と話している。

現地は埋め戻されており、説明会は行われない。



弥生時代前期末ごろに建てられたとみられる「松菊里型住居」跡
—桜井市の脇本遺跡

「松菊里型住居」跡も出土

桜井の脇本遺跡の朝鮮半島由来の珍しい建物

19日、発表した脇本遺跡半ごろの大型建物跡。今回

県立橿原考古学研究所が（桜井市）出土の7世紀後

の調査地では、弥生時代前期末（紀元前2000年前後）ごろに建てられたとみられる朝鮮半島由来の珍しい「松菊里型住居」跡も見つかった。同様の建物跡の出土は県内4例目という。支柱を円錐形に組む松菊里型住居跡は、今回出土した大型建物跡の北東側の隣接地で確認された。直径約7・5メートルの円形に計7個の柱穴を確認。遺構

の中心部分には幅約1・3メートル、深さ約0・4メートルの楕円形の炉とみられる穴も見つかった。さらにこの穴の周辺では、焦げた土や炭が広がっていたほか、磨製石器の材料となる岩片や石製矢尻なども出土した。中心部に暖を取るための炉を設けた石器工房などの建物とみられ、当時の渡来人が使用した可能性もあるという。橿原研は「今回の松菊里型住居跡は、従来の発掘例と比べて遺構の規模が大きく、学術的価値が高い」と話している。

奈良

.....
ニュースのご連絡は
奈良支局

〒630-8283
奈良市油留木町44-2
0742(26)6381-3
FAX 0742(27)2059

駐在

橿原 0744(29)3065
高田 0745(22)8237

販売のご用は
0742(24)2214

広告のご用は
0742(32)1220